
閉ざされた地平線：北朝鮮の小学校教科書に見られる 国民アイデンティティの言語的構築の実状

A shrunk universe : North Korea's "Earthly Paradise"

SOONHEE FRAYSSE-KIM

Abstract

According to the North Korean authorities, their country is a worker's paradise ruled by beloved and competent leader Kim. In reality, North Korea is a secretive, isolated, heavily militarized and desperately poor country. And it is a wonder that the regime still survives some twenty years after the collapse of the communist bloc but what is most surprising is the behavior of the people, even allowing for their intimidation, that they seem to obey Kim so blindly, and genuinely entrust their fate to him. Like the people of a besieged fortress, they are so afraid of something coming from the outside that they prefer to stick together in their perilous situation.

This study is an attempt to understand the state of mind of the people of North Korea, and explores the discursive construction of national identity through a systematic analysis of language in school textbooks currently used in North Korea. Using the corpus analysis technique, I have investigated the characteristics of language use in NK textbooks through their comparison with those used in South Korean. To this end, a database was established comprising approximately 300,000 words from the textbooks of the two groups. I gave a special attention to 5 words "father", "we/us", "home", "enemy" and "world" whose use in NK textbooks was quantitatively and semantically different to SK textbooks. I consider these words as the central axis of linguistic construction (pivotal words) of North Korea's ideal world. I aim to show how the idea of others is crystallized around these 5 pivotal words and how the linguistic construction of national identity is articulated in the dichotomic frame of in and out, us and others, paradise and hell, etc.

Of course, the idea of the other is a foundational component in the construction of national identity. This study shows that in the case of North Korea, whereas the frame is sharp, the identity of the other remains blurred, and this acts as an excellent tool for self seclusion and generation of "otherphobia".

1. はじめに

公式的には北朝鮮は「敬愛する指導者」によって統治される「地上の楽園」なのである。しかし、現実には、飢餓にさらされた国民の食糧問題の解決より軍備を優先し、核攻撃で周辺国を脅かすことを唯一の自己防衛の方策とみなす独裁者に、全国民が疎んでいる完全統制社会の国である。建国以来の最大目標であった「人民に米のご飯と肉のスープを」の実現もできないまま建国60年を迎えた今年、北朝鮮当国は公式メディアを通じて、全ての苦難の原因は外部の「敵」であり、唯一の生存方法は国民の「一心団結」であると主張する。「団結」とは「首領を決死で擁護する結晶体」を意味し、「英導者」の「愛と信頼」への「恩返しと義理」であり、2300万の「総爆弾」

であると訴えている。(朝鮮労働党機関紙「労働新聞」2008年9月8日)。北朝鮮当国は自国民に、生存の唯一の方法として国民全体が一つの兵力になって首領を死守しながら、外部の「敵」に立ち向かう、いわば自爆的レジスタンスの道を推し進めているのである。北朝鮮は21世紀のマサダなのか？

このような北朝鮮の現政権が東欧共産主義陣営の崩壊の後に20年以上も生き残っていることも不思議であるが、最も驚くことは北朝鮮の人々の態度である。威嚇であるとはいえ、彼らはあまりにもキム・ジョンイルに無批判的に従っている。あたかもみずからの運命を彼に任せているように。攻囲された要塞の生存者の群集と同様、彼らは外を恐れるあまり内の貧窮に居座りたがるようにみえる。

本論はこのような北朝鮮の人々の態度を、小学校の国語教科書ディスクールに内在する国民アイデンティティの言語的構築の仕方から理解しようと試みるものである。本論では、2008年現行の北朝鮮の教科書に見られる言語使用の特徴を、同じ時期の韓国の教科書との比較を通じて調べた。南北の教科書の間で、その使用における意味的、数量的に大きなズレが見える「아버지 abeoji (お父さん)」、「우리 uri (我々)」、「집 chip (家)」、「적 cheok (敵)」、「세상 sesang (世、世の中)」の5つのことばに注目した。これらのことばは北朝鮮の「地上の樂園」のディスクールにおける中心軸 (mots-pivots) を果たしていると考えられる。

2. 国民アイデンティティの形成におけるよそ者の存在

ディスクールはイデオロギーの言語的具現である。支配イデオロギー装置の中心をなす学校教育は、当該共同体の理想的な主体を形成する社会化の実践現場である (Althusser, Pecheux, Durkheim)。特定のイデオロギー的共同体の主体の間で分け合われる我々意識は、その共同体の結束力及び帰属感を形成・維持する上で不可欠なものである。我々意識には必然的に我々と他の集団との区別化つまり包含 (inclusion) と除外 (exclusion) の思想がつきまとう。Calhoun は自己認識はいくらそれが発見のように感じられても常に構築の途中であり、それは他人に特定な仕方では知られたいという自己からの要求と離れることができない (1994:9-10) という。同様に我々意識もよそ者の存在を通じてしか感じるができない。つまり、Foucault の言うように、よそ者 (l'Autre) の存在は我々 (le Même) の存立における本質的要素であり、我々と相関関係にあって、我々の秩序に属さない外にあるものである (Foucault 1964:40)。従って、よそ者の本質は必ずしも解明できるものではないし、解明する必要性もない。なぜなら、それは我々のアイデンティティを肯定する為に否定するものであり、我々の政体性を設定するために作り上げられた幻影であるかも知れないからである。Cooley の「鏡の中の自己」のように我々は常に他人に投影された我々の姿を想像する (Scheff 285)。北朝鮮の教科書にみられる「世界の人民達はピョンヤンを希望の燈台として仰ぎみています」のような記述から、北朝鮮当国が閉鎖的孤立政治路線を固執しながらも常に他人の目 (外部世界) を通して自己確認をしたがるのがわかる。しかし、この「世界の人民達」とは、後述するが、実体がなく北朝鮮の支配イデオロギーにおける我々のカテゴリー

内で解釈されるのみである。

全てのアイデンティティは構築されるものであるが、国民アイデンティティは主に学校教育という「若き世代の方法的社会化」(Durkheim 1985:50-51)を通じて集団的に構築されることで、その社会の正統的なアイデンティティとみなされる。社会体制が独裁的また強圧的であればあるほど、国民アイデンティティの構築は政府独占になり、国民アイデンティティは社会のどんなアイデンティティよりも優先される。日常生活のなかで国民アイデンティティは国民意識として現われる。権力者は権力の維持のため国家の利益を掲げ国民意識を高めることに努める。国民意識を高めることは国民の間の“我々意識”を強めて国民の間の最大限の意見一致を得ようとするところだが、その際しばしば用いられるのが外からの脅威である。現在、北朝鮮当局があらゆるメディアを動員して自国民にさし迫った戦争の危機を絶えず宣伝して社会内に戦時の雰囲気醸成するのも、当面の政治・経済的問題から国民の関心をそらせると同時に、“我々”のつながりを引き締めて国民一致の完全統制社会を作り上げようとする政策でしかない。そして、その政策は今からみるように国民教育の初期段階から既に始まっているのである。

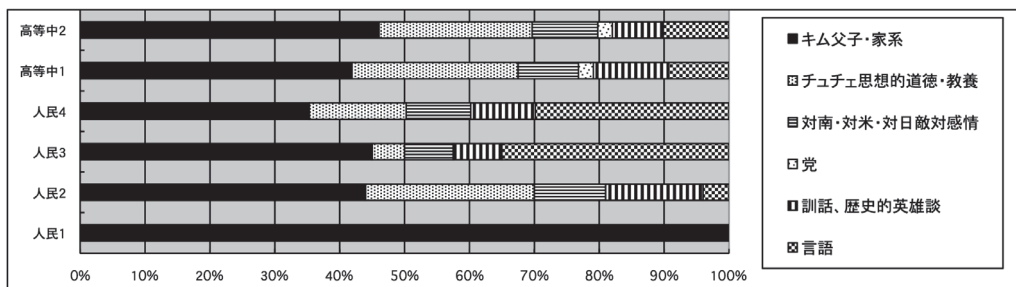
3. 北朝鮮の教科書の分析

分析の対象は北朝鮮で1990年から2001年の間に発行され、2008年現在使用されている人民学校1～4年と高等学校1～2年の合計6年分（日本の小学校の全課程に当たる）の国語教科書である。比較のために用いるのは同時期の韓国の2000年代の教科書である。韓国の教科書は長い間の民主化運動が実り、韓国政治史上初めて野党への政権交代が実現された金大中政権の発足に伴って改正されたものである。新しい政権の民主化の政治理念が教育方針に反映されているため、北朝鮮の教科書の良い対比物になると思われる。どちらの教科書も国定図書であり、2008年現在、各々の国でこれらの1種類のみの国語教科書が使用されている。

3.1 北朝鮮の教科書

北朝鮮の小学校教育課程の国語教科書は、図1に見られるように、主に政治思想的内容、特にキム父子を偶像化する内容で構成されている。

図1. 主題別内容



人民学校1年用（日本の小学校1年に当たる）の読本「敬愛する首領キム・イルソン大元帥様の幼年時」を見ると、すべての単元がキム・イルソンの生まれた場所「マンギョンデ」を舞台にした、キム・イルソンの家族と幼いキム・イルソンの美談に割り当てられている。子供達は「경애하는 대원수님의 아버님이신 김형직선생님（敬愛する大元帥様のお父様であるキム・ヒョンジク先生）」「경애하는 대원수님의 어머님이신 강반석선생님（敬愛する大元帥様のお母さまであるカン・バンソク先生）」などのことばを習うことから小学校の生活を始める。

リテラシ教育における文法や音韻規則、正しい言語生活などの言語的知識を教える時も金父子讃美のプロパガンダを用いる。いくつかの例を挙げてみよう。（以下日本語訳は筆者のもの）

—正しい応答文の例

「例えば、<<偉大なるキム・ジョンイル元帥様はいつ、どこで誕生されましたか？>>と質問されたら、<<偉大な英導者キム・ジョンイル元帥様は、チュチェ 31 年（1942）年 2 月 1 6 日に白頭山ミルヨンで誕生されました>>と正しく答えなければなりません」（人民 2 年：正しい応答文）

—敬語用法として「高く仰ぎ仕える」言葉に関する項目が設けられ、その使用の対象はもっぱらキム父子である。

「私達は、敬愛するお父さんキム・イルソン元帥様と親愛する指導者キム・ジョンイル先生に仕えて生きていることを最も大きな幸福であると思いながら（・・・）お父様元帥様と親愛する指導者先生の尊名を称する時には、前と後に限り無い尊敬と欽慕の心が込められた言葉を鄭重に使わなければなりません。

偉大な首領キム・イルソン元帥様

敬愛する首領キム・イルソン元帥様

父なる首領キム・イルソン元帥様

敬愛するお父さんキム・ジョンイル元帥様

親愛なる指導者キム・ジョンイル先生（人民 3：敬語用法）

—正しい朗読方法

「まず、文を読む時、敬愛するお父さんキム・イルソン大元帥様と親愛する指導者キム・ジョンイル先生に対する尊敬と欽慕の情を表す文章はゆっくり、至極丁寧に読まなければなりません。」（人民 4 年：「文章を読む時の正しい速度」）

—良い観察日記の例文

「私は金魚を袋に包み持って学校へ走り、敬愛するお父さんキム・ジョンイル元帥様が送って下さった拡大鏡で再び観ました。」（高等中 2：観察日記：筆者訳）

このように北朝鮮の小学校の教科書が政治思想的で、特にキム父子の栄光をたたえる内容一色であることは、教科書を一瞥すればわかる。しかし、このような可視的かつ表面的な記述とは別に、言語使用に織り込まれているイデオロギー操作がある。イデオロギーの操作は、個人に呼びかけ個人をイデオロギー的主体に変えるプラチック（実際行為）を通じて実現される（Althusser 1970）。国語教科書では“このように話す”“このように理解する”という同化（assimilation）と説得（persuasion）のイデオロギー的操作のプロセスが言語使用に織り込まれている。そのため教科書の言語使用のあり様をより深層的なレベルで観察する必要があると考えられる。以下の分析はその“深層的レベルの観察”の一つの試みである。

3.2 分析方法

Hunston はテキストのなかに潜在するイデオロギーを見いだす方法としてコーパス言語学的分析の有効性を力説し、ことばの出現頻度の情報は特定共同体で重要視されている社会的側面を推定する鍵になると論じる（Hunston 2002）。また特定のことばとことばの共起パターンの頻繁な反復は“cliché(固定概念)”を生み出しやすい（Sinclair 1966）。従って、頻度と共起パターンの観察を基にするコーパス言語学的分析は、言語使用に織り込まれているイデオロギー的作用をフィルタリングには非常に客観的かつ合理的な方法であると考えられる。

本論は主に頻度と共起パターンの観察を基にするコーパス言語学的分析 (Stubbs 1996, 2001; 藤村 2005) を用いた名詞中心の語彙分析である。韓国と北朝鮮の小学校の国語教科書に基づく 20 万語弱のデータベースから、“意味ある”または“重要である”とみなされることばを浮かび上げさせるため筆者は次の作業過程を実践した。

①基準値以上の名詞を集め標本を作る。

比較する教科書の語彙量に合わせて調節した一定の頻度的基準¹(10 万文字あたり 2 回以上出現することば)を満たす名詞²を摘出して、代名詞を除いた一般名詞のみの標本を作る。

②社会活動の主体となるものを探す。

標本の名詞をその内容によって概念別に分類³し、そのなかから「人間活動の主体」を示すことば、つまり組織と身分を表す名詞を一覧化する。

③使用上特徴が見える組織名や身分名を探す。

組織と身分を表す名詞の一覧から高頻度に出現することばをリストアップする。これらのこと

¹ 表 2 に見られるように基準値を満たすことばは両方の教科書で少なくとも 1 学年 1 回以上出現する名詞である。

² 韓国語の名詞はその文法的特性によって、一般名詞、依存名詞、固有名詞の 3 つの範疇に分けられる。本論の名詞の範囲には形容詞や動詞の名詞形は取り入れない。

³ 国立国語研究所発行の『分類語彙表』は語彙を単語の意味によって 5 つのカテゴリーで分けている：I. 抽象的關係を示すことば（‘上’‘下’のような空間的關係や有無、存在、力など人間や自然のあり方のわく組を示す類）。II. 人間活動の主体を示すことば（‘家族’‘国家’などの組織、また‘母’‘看護婦’‘消費者’など親戚名や身分を示すことばの類）。III. 人間活動を示すことば（‘感動’‘公演’‘教育’等人間の精神的及び行為的活動そのものを示すことばの類）。IV. 生産物・用具を示すことば（‘靴’‘お菓子’‘庭園’など人間活動の生産物またその結果や用具を示すことばの類）。V. 自然物・自然現象を示すことば（‘川’‘谷’‘猫’‘天気’など自然物及び自然現象を示すことば）

ばの出現パターンを比べる。実際の文脈のなかでこれらのことばが含有している社会文化的意味を対比する。

3.3 分析データの概観

各教科書の全体語彙量と標本の情報は表1のとおりである。NKは北朝鮮の教科書、SKは韓国の教科書である。また北朝鮮の教科書から作成された標本はnk、韓国の教科書から作成された標本はskとする。

表1. 各教科書の語彙量と標本のサイズ

教科書名	総文字数(10万文字)	総語数	名詞の数(延べ語数)	標本名	名詞の数(延べ語数)	教科書のなかの実際頻度	相対頻度
NK	2.78	82,766	4,296 (35,412)	nk	882 (24,439)	6回以上	2.2回以上
SK	3.49	114,312	5,477 (47,439)	sk	1,094 (31,025)	7回以上	2.2回以上

表1に見られるように各教科書におけるそれぞれの標本の名詞の数、つまり異なり語数(types)の割合は、nkが21%、skが20%で両方とも該当教科書全体の名詞の異なり語数の2割を占めている。一方、名詞の述べ語数(tokens)つまりテキストに表れる一つ一つの名詞を数え上げた総数の場合、韓国の教科書の標本の名詞の述べ語数は教科書全体の名詞の述べ語数の65%、北朝鮮の標本は69%を占めている。どちらの教科書においても、標本の名詞はその使用頻度が活発な名詞の集まりであると言える。

表2は、各教科書に出現する全ての名詞の異なり語数(types)と述べ語数(tokens)、各標本の名詞をその内容によって概念別に5つのカテゴリーに分類し、それぞれのカテゴリーの名詞の数(types)と述べ語数(tokens)、そして各部分のタイプ・トークン率⁴を算出して示したものである。全体的に韓国の教科書のほうが北朝鮮よりタイプ・トークン率が高い傾向をみせる。

表2. 分類別名詞の量とタイプ・トークン率(Token Type Ratio)

標本	分類	抽象的關係	人間活動の主体	人間活動	生産物	自然物・自然現象	total	教科書全体名詞
nk	types	90	197	278	136	181	882	4296
	tokens	2903	9713	5962	1683	4178	24439	35412
	TTR	0.031	0.02	0.047	0.081	0.043	0.036	0.121
sk	types	117	203	327	187	260	1094	5477
	tokens	4470	8337	8447	3127	6644	31025	47439
	TTR	0.026	0.024	0.039	0.06	0.039	0.035	0.115

つまり教科書全体の名詞においても、ほとんどのカテゴリーの名詞においても韓国の教科書の方が名詞の反復使用がより多い。しかし、このようなSKの反復使用度が高い傾向が人間活動の主体のカテゴリーの場合だけ逆転していることが注意を引く。この現象は下のレーダー図でみる

⁴ タイプ・トークン率(以下 TTR)はある言語標本において types(異なり語数)を tokens(述べ語数)で割ったものであり、TTRが高いほど繰り返し使われる語が少ないことを意味し、その標本の語彙の多様さを示すと認識されている。(参照:『応用言語学事典』, 2003. 研究社, *Dictionary of language teaching & applied linguistics*, 1999, Longman)

とよりわかりやすい。

図2. 概念別分類によることばの使用様子

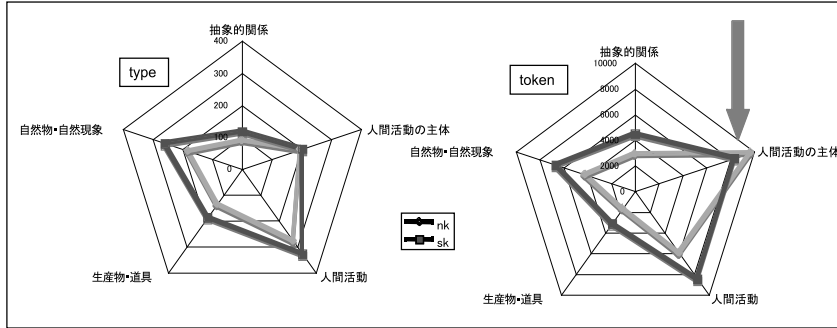
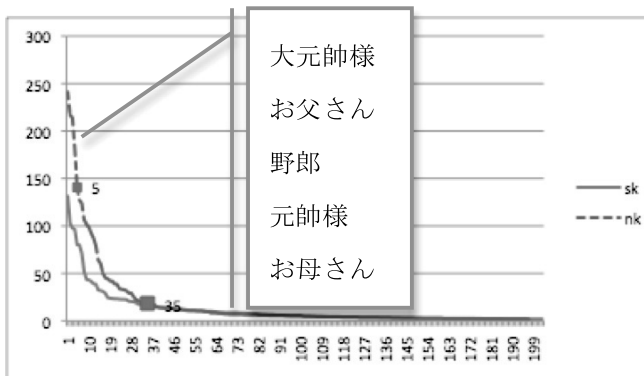


図2を通じて、韓国の教科書の標本の名詞群は北朝鮮の標本に比べて一般的にその種類 (types) も使用頻度 (tokens) も多いことが再び確認できる。また両方で人間活動の主体を示す名詞、いわば社会生活の主要な構成部分である組織や人の呼称、身分を示すことばの使用頻度が高いのは、どちらの教科書でも主体なるものを示す名詞は限定されたものが繰り返し使用されている事実を表す。しかし矢印の指す部分は既に表2で観察された北朝鮮の標本の中で唯一タイプ・トークン率が韓国より高くなる部分である。このような名詞の使用における並外れた傾向から、北朝鮮の教科書には、社会組織や身分を表す名詞群のなかにある種の名詞が集中に使用されていると推定することができる。

左の図3は実際に両標本の人間活動の主体のカテゴリーに属する全ての名詞の出現頻度をグラフ化したものである。

図3. 組織や身分を示す名詞の出現頻度の状況



両標本における該当カテゴリーの名詞の出現頻度の間に格差が現れるのは頻度35位から上の名詞群である。北朝鮮の場合この35の名詞群の使用頻度(7,146回)の該当カテゴリー名詞の総頻度(9,713回)に対する割合は74%で、韓国の62% (5,082対8,337) に比べてかなり高い。さらに北朝鮮の頻度数最上位の、図3に示した5つの名詞だけの使用頻度(2,762回)が人間活動の主体のカテゴリー名詞全体の総頻度の28%を

占める。ここで明らかになったのは上で推定したように北朝鮮の教科書には組織や身分を示すことばの使用に頻度的な偏重があること、特に頻度最上位の5つの名詞が集中的に使用されている

ことである。これら5つのことばの使用を含め、高頻度35位から上の名詞群の内容と使用実態を今からより詳しくみることにする。

3.4 分析データの詳細

3.4.1 教科書全体における高頻度20位以上の名詞の一覧

表3は、北朝鮮と韓国の小学校の国語教科書のなかの、最も頻度が高い名詞20個である。先ず言えることは北朝鮮の高頻度の名詞には政治及び軍事的呼び名が多いこと、また身分・呼称の

表3. 高頻度20位の名詞

順位	韓国教科書	相対値	北朝鮮教科書	相対値
1	私	394	ウリ	287
2	ウリ	265	大元帥	241
3	仕事、こと	134	野郎	210
4	人	131	お父さん	206
5	家	103	私	200
6	先生	98	元帥	181
7	中、内	95	先生	124
8	子、童	93	音	108
9	音	89	友 dongmu	102
10	考え	84	時	102
11	時	82	仕事、こと	98
12	友 chingu	80	人	97
13	お父さん	80	家	92
14	国	71	おじさん	87
15	本	67	子、童	87
16	心	65	将軍	86
17	話	64	中、内	84
18	あなた	60	お母さん	141
19	姿	56	心	80
20	分	56	国	79

数が韓国より2倍多いことである。この点については後でより詳しく見ることにする。この表3で最も興味深いことは「私」と「ウリ（我々）」の使用の南北格差である。教科書ディスカールのなかの「私」と「我々」はどちらもイデオロギー的主体を指し示すが、「私」が個別的な主体を示すのに対して「我々」は集団的主体を表している。

2000年代の韓国の教科書では個別的主体「私」が集団的主体「ウリ（我々）」より優先される。一方、北朝鮮の教科書では「ウリ（我々）」が「私」より優先されるだけではなく、「私」の使用頻度は「大元帥」や「お父さん」などより低いことに注目すべきである。

3.4.2 教科書のなかの組織と身分

上の図3で概観した、組織と身分を示す高頻度35位より上の名詞群に焦点を当てて、その内容と使用実態を詳しく見ることにする。まず両方の名詞をその出現頻度の相対値と一緒に一覧化し表4にまとめた。

図3にみられるように北朝鮮の教科書の組織と身分を示す名詞群のなかで高頻度35位以上の名詞の使用頻度は他の名詞に比べて著しく多くなる。おそらくこれらのことばは教科書のなかで最も頻繁に言及される組織名や身分・呼称であろう。「頻繁に行われる事象は重要である」(Stubbs 1996,2001)。以下これらのことばの使用実況を綿密に調査する。

表4. 組織と身分名の高頻度35位以上

順位	韓国教科書	相対値	北朝鮮教科書	相対値	順位	韓国教科書	相対値	北朝鮮教科書	相対値
1	ひと	131	四大元帥様	241	19	兄	24	首領	42
2	家	103	お父さん	217	20	家族	23	学校	42
3	先生	98	野郎	214	21	老人	23	祖国	39
4	子ども	96	元帥様	181	22	世	23	学生	38
5	友	80	お母さん	141	23	少年	23	地主	34
6	お父さん	80	子ども	127	24	兵士	23	人民	33
7	国	71	先生	124	25	世界	23	世	33
8	自己	52	将軍	106	26	教室	22	お婆さん	32
9	学校	44	友	102	27	お母さん	21	弟	29
10	村	43	ひと	99	28	社会	20	敵	29
11	児童	42	家	92	29	お化け	20	少年団	26
12	おじさん	39	おじさん	87	30	人物	19	兄	22
13	お婆さん	39	家	79	31	首都	17	領導者	22
14	母ちゃん	32	自己	64	32	他人	17	姉	20
15	お爺さん	32	指導者	60	33	息子	17	仇敵	20
16	王様	31	少年	50	34	自身	16	将校	19
17	みんな	29	お爺さん	45	35	弟	16	教室	18
18	大人	24	村	44		tt	1414	tt	2571

(1) 呼称・身分名に見られる3つのカテゴリー

表4をみると、韓国の教科書で頻繁に使用される身分名は一般に年齢についてのものか親族名

表5. 呼び名の3つの分別

一般人用		金父子用		敵用	
呼び名	頻度	呼び名	頻度	呼び名	頻度
お母さん	141	大元帥様	241	野郎	214
子ども	127	お父さん	217	地主	34
友	102	元帥様	181	敵	29
おじさん	87	先生	124	仇敵	20
少年	50	将軍	106		
お爺さん	45	指導者	60		
学生	38	首領	42		
人民	33	領導者	22		
お婆さん	32				
弟	29				
兄	22				
姉	20				
将校	19				
tt	746	tt	993	tt	296

である。一方、北朝鮮の場合は軍事的なものが多い。実際北朝鮮の教科書のなかの呼称や身分名はその用いかたによって表5のように3つに分けることができる。

まずは金父子専用の呼び名があり、次に一般人用、そして敵用である。分類別の身分名の総頻度をみると、金父子用の呼称の使用頻度が一般人用の呼称に比べて遥かに高い。周知のとおり北朝鮮の教科書で最も頻度が高い呼称は「大元帥様」である。これは亡き国家主席キム・イルソンを称することばの一つで、「キム・イルソン」との共起率が100%である。

(2) 親族名の使用における特徴

表5には親族名の一つの「お父さん」が金父子用に分類されているが、実際に北朝鮮の教科書のなかで使用される親族名は、その範囲が広く、その対象は直系家族よりむしろ「われわれのお父さん、お母さんたち」のような広い集団的な使用例が多い。つまり、社会全体が一つの家族のように共同体的な意味の父、母、兄、姉、弟の使用が目立つ。特に「お父さん」は「お父さん首領」という呼び方で最も頻繁に使用されている。「お父さん」ということばの発話の10回のうち8回はキム・イルソンかキム・ジョンイルのことである。また「お母さん」の使用の9割がキム・イルソンの母か、キム・ジョンイルの生母に当てられる。

国家元帥を「아버지 abeoji (お父さん)」と呼ぶことは、国家元帥と国民の関係を親子関係に代替させ、同時に国家元帥に対する忠誠に、親孝行という必然性を与えてしまうことになる。儒教的道徳観念に基づく「孝」は、朝鮮半島の人々の伝統的価値観において最も大事な徳目である。「朝鮮半島の伝統社会で、家系の利益が国家のそれとかけ合う時、『孝』を重視して、家系のことを優先するほど、『孝』という個人的義務の前にはほかのどんな社会的価値も参ってしまう」(チェ 1995:62)といわれるほど「孝」は朝鮮半島の倫理観において強力なものである。結局、金父子を「お父さん」と呼ばせることは、国民を「孝」という伝統的倫理観に縛りつけ、そこから「父なる首領に対する類なき忠誠」(鐸木、1992:127)を汲み取ろうとする政治的意図が働いていると考えられる。

(3)「家族」の過少使用

「お父さん」や「お母さん」の使用の大部分が金父子とその家族の呼び名として使用され、「兄」「姉」などの親族名も血縁的意味より社会共同体の構成員の間に分配された役割名のような用い方が強いとすれば、実際「家族」という血縁的組織はどうなっているのかが疑問になる。北朝鮮の教科書の中で「家族」ということばは他の組織を示すことばに比べて存在感が薄い。

表4をみると韓国の教科書の場合、最も頻繁に出現する組織名には、「家族」を始め、家族の類似語である「家」と「村」、「社会」、「国」、「世」、「世界」等があり、ここには現代社会の基盤組織がそろってみられる。一方、北朝鮮の教科書には「家」、「村」、「国」、「祖国」、「世」そして「少年団」がある。韓国のそれと比べると「家族」と「世界」が欠けていて、代わりに「少年団」が重要視されているように見える。

まず「家族」の欠如と類似語の「家」の代替使用について探ることにする。

北朝鮮の教科書全体で「家族」が出現するのは4回のみである。韓国語で、家族を表すことばには、「가족 kajok (家族)」以外に「식구 siku (食口)」、「가정 kajeong (家庭)」、「집 chip (家)」などの類似語がある。

「가족 kajok (家族)」とは「夫婦、親子、兄弟姉妹など血縁によって結ばれて生活を共にする生活共同体」と規定されている「社会の基本的単位」(川本 1980:14)を示す。「식구 siku (食口)」は、「一つの家に一緒に住み、食事を共にする家族の構成員のことをさし、構成員の成立関係を顧慮しない」(『アジアの家族』1987:36) 集団を示すことばで、より日常用語に近い。「가정 kajeong (家庭)」は、「個別家族を集团的に指す」用語である。「집 chip (家)」は住まいの根拠地、場所または、「住まいと暮らしを現実的に一緒にする集団」を指し、「親族関係がない人も含まれる、世帯のような概念」(チェ 1995:710)をもつことばであって、辞書⁵では「가정 kajeong (家庭)」の同義語のようにみなされている。つまり、「우리 집 uri chip (わが家)」と「우리 가정 uri kajeong (わが家庭)」はほぼ同じ意味の言い方である。

⁵ 『새우리말 큰사전 (大辞典)』三省出版社、ソウル、1981

『조선말 사전 (現代朝鮮語辞典)』学友書房、東京、1968

『두산 동아 백과사전 (ツサンドンア百科辞典)』(kr.encycl.yahoo.com)

韓国の「집 chip (家)」の概念を「集合主義」との関係から見る学者たちは韓国の家族主義を「チプ中心思想」と規定して、家族主義を「家族優先性、父系家門の永続化、父母恭敬意識と兄弟姉妹および親戚間社会経済的紐帯意識」とみなしている（リ 1996:549）。そして、韓国社会は伝統的に集合主義が支配的理念であり、集合主義的傾向は家族を構成して運営する家族制度にもそのまま反映されていると言われている。

このように韓国の「家意識」は「個人の自由と満足より家族の安寧と発展、利益を優先」（リ ibid: 552）する家族中心の集合主義に凝縮されているようにみえる。つまり、「家族」が Triandis (1995) のいう、個人の自由、幸福、権利が何より優先的に考慮されるべきであるとする考えに基づく「個人主義」的概念を内包しているならば、「家」は集団の安慰と存続が個人のそれより優先される「集団主義」的概念を含んでいる。

北朝鮮の教科書で「家族」ということばがほぼ欠如しているなかでもっぱら「家」が使用されている事実から次のような解釈がなされる。一方では血縁中心の個人主義的な家族の存在を否定しながら、他方では家族の概念を「家」の概念に取り替えようとする。そうすることで個々の家族の存在が弱められ、一つの家族のように運命をともにする国家共同体の存在が強調される。

このようなことばの使用の背景には上で既に見た親族名の共同体の使用と同じように、国民を一つの家族のように扱いながら国家完全統制を図る北朝鮮の「大家族国家」の理念が働いていると考えられる。

（４）「敵」の正体

表3をみるとわかるように、北朝鮮の教科書の名詞のなかで高頻度で出現することばは「ウリ」「大元帥様」に次いで「野郎」である。このことばは、北朝鮮の敵とみなす全ての対象につける。例えば、「地主」は「地主の野郎」、「宣教師」は「宣教師の野郎」、日本帝国主義者を意味する「日帝」は「日帝の野郎」、米国帝国主義者の「米帝」は「米帝の野郎」のようなかたちで示される。「野郎」はよそ者を見分ける言語的サインになっていると言えるほどその使用が習慣的である。

実際北朝鮮の教科書には、教育用の図書とはいいにくいほど粗暴なことばや表現が平気に出現する。敵と定められた対象に対しては俗語や卑語で乱暴で粗野な表現を遠慮なく使う。むしろこのような言い方は北朝鮮の標準語である「文化語」の話法の一つとして教えられている。

물론 원수놈들에 대하여 말할 때에는 ≪ 지주놈의 쌍통 ≫, ≪ 미제놈 돼졌다 ≫ 는 식으로 말해야 합니다.

（もちろん仇敵の野郎達に対して話す時は「地主の野郎のあのつら」、「米帝の野郎がくたばった」のようなスタイルで話さなければなりません。）（人民3年「文化語で話そう」）

그리고 원수놈들에 대해서는 머리는 대가리, 죽다는 돼지다, 먹다는 처먹다 등의 속된 뜻같은 말을 써서 원수놈들의 더러운 몰골을 나타내야 합니다.

（それから仇敵の野郎達に対しては頭はデガリ、死ぬはくたばる、食べるはチョモッタなどの

俗語の同意語を使って仇敵の野郎の汚らしいありさまを表わさなければなりません。)(人民4年「同義語と反対語」)

「원수 wonsu(仇敵)」は敵なるものを最も憎む表現である。韓国語の「仇敵」は「自分または自家、自国に害を被らせ恨みを持たされた対象」の意味で一般に許されない敵、恨みをはらすまで忘れぬ対象を指し示す。北朝鮮の人民の「仇敵」は主に「日帝」と「米帝」であるが、事実上「日帝」が出てくる物語の背景は、ほとんど過去の植民地時代である。しかし、米国は朝鮮戦争の時だけでなく、今も南の「我々の土」を侵略している「미제 mije (米帝)」の「승냥이 seungnyangi (山犬)」または「미국놈 miguknom (米国の野郎)」として描かれ、持続的な敵としてみなされていることがわかる。

これら「野郎」、「敵」、「仇敵」は過去や現在の北朝鮮の敵なる国や社会的身分を示す際必ず用いられている。例えば、「日本の野郎」や「米国の野郎」の言い方は固定表現になっていて「日本」や「米国」の人々を敵なるよそ者と見なす以外別の認識の方がない。表5で既に見たが、「元帥様」、「指導者」、「英導者」などがもっぱら金父子を称することばとして固定されているように「野郎」、「敵」、「仇敵」はよそ者を指摘する言語的サインなのである。

北朝鮮の国語教科書には各学年ごとに、「お父さん元帥様を防衛して」、「米帝の山犬」、「さんざんな目に遭った日帝の野郎達」等の題名の戦闘談が3～4個以上掲載されている。物語の筋は植民地時代のキム・イルソンの武勇談か朝鮮戦争の戦闘談であるが、物語のなかの「敵」の悪行や戦いの場面は非常に生々しい表現で描かれている。

그리고는 <자, 이것이 전두환이 보내는 선물이다!> 라고채치면서 시퍼런 총창으로 누나의 앞가슴을 쿡쿡 찌러 후벼대고 내동댕이쳤습니다.

(それから、“見ろ、これがチョン・ドハンからの贈り物だ!”と叫びながらとぎすました銃槍でお姉さんの胸をプスプスッと刺しほじくり地面に叩きつけました。)

(人民4「姉の写真」)

조군실영웅아저씨가 증기를 쏩니다.

아저씨는 머리와 두팔에 부상을 입었습니다. 봉대를 감았으나 피는 계속 흐릅니다.

아저씨는 손으로 증기를 쏘수가 없었습니다. 그래서 이발로 증기를 쏩니다.

증기는 세차게 불을 뿜습니다.

(チョ・グンシル英雄おじさんが重機(機関銃)を撃っています。

おじさんは頭と両腕を負傷しました。包帯を巻いていますが血がたて続けに流れています。

おじさんは手で重機を撃つことができません。それで歯で重機を撃っています。

重機は激しく火を吐いています。米帝の野郎はバタバタと倒れています。)

(人民2「チョ・グンシル英雄おじさん」)

(…) 아버지대원수님께서는 바로 이것을 리용하여 일제놈들끼리 싸움을 하도록 하셨던것이다. 드디어 숲속에서는 맹렬한 싸움이 벌어졌다. 제놈들끼리 맞붙은 개싸움이였다. 총소리가 콩북듯하고 (…) 곳곳에서 죽어너무러지는 일제놈들의 비명소리가 어지럽게 들려왔다. 하늘을 덮은 밀림이 성난듯 울부짖으며 좌좌 설레였다.

((…)) お父さん大元帥様は正しくそれを利用して日帝の野郎の仲間同士で戦うようにさせた。ついに、森のなかでは猛烈な戦闘が行われた。味方同士戦う犬の戦いだった。

銃が乱射して (…) あちこちで犬のように倒れていく日帝の野郎達の悲鳴があちこちから聞こえた。空を覆った密林も怒っているようにザーザーと泣き叫んだ。)

(人民4「根こそぎにされた日帝の野郎たち」)

このように教科書のなかのほとんどの戦闘談は、植民地時代の被抑圧の記憶や朝鮮戦争などの過去の怨みや戦いの経験を再生させている。そしてむやみに残酷な戦闘の場면을繰り返し強調することで子供達の感受性を刺激し敵対心を燃やさせ、戦闘的気質を高めようとしている。

(5) 「世、世の中」と「世界」

既にみたように、北朝鮮の社会基礎組織で「家族」とともに欠けているものは「世界」ということばである。実際、北朝鮮の教科書のなかに「世界」の出現は全部で10回で、それは「世」の出現頻度91回に比べて非常に少ない。韓国でも「世、世の中」は「世界」より多く出るが、頻度の差はそれほどではない(91対81)。

「세계 segye (世界)」と「세상 sesang (世、世の中)」は意味的には類似性があるとしても、本来は概念が異なる語である。辞書では、「世界」の一次的意味は「地球上の全ての国家、全ての地域、全人類社会」(『国語辞典』三省堂)、「地球上のあらゆる国。地球全体。地球上の人類社会全体。万国」(『大辞典』三省出版)、「(人類社会の面で見た)地球。人類社会全体、または地球上のあらゆる国」(『現代朝鮮語辞典』学友書房)と定義される。

一方、「세상 sesang ((世、世の中))」は「人類が住んでいる地球上、世間。一人の人間が生まれてから死ぬまでの間」(『大辞典』三省出版)、「人々が住んでいる地球上。自分が住んでいたたり、活動している社会または領域」(『現代朝鮮語辞典』学友書房)と定義される。

つまり、一般に「世界」は、地球上で自国を囲むあらゆる国を包括的に示す具体的な区画の概念を持つ語として理解される。その反面、「世、世の中」は、「自分のまわりの空間、あたり、生活活動の空間」の意味で、明白な区画的範囲が示されないまま、「この世を去る」また「この世、あの世」のように、より形而上学的で観念的な意味を持つ語としてその意味が区別されている。

両国の教科書に出ている「세상 sesang (世、世の中)」の使用例をみると、

「세상」에는 나라도 많고 나라마다 수도가 있습니다.

(「世」には国も多く首都も多いです。)(北朝鮮、高等中1年)

우리는 「세상」에서 제일 행복합니다.

(我々はこの「世」で一番幸せです。)(北朝鮮、人民3年)

「세상」사람들은 평양을 가르켜 《공원속의 도시》라고 부르고있습니다.

(「世」の人々はピョンヤンを《公園の中の都市》であると称えます。)

(北朝鮮、人民4年)

세상에서 가장 빠른 말 (「世」で一番速い馬) (韓国、小3年)

까마귀는 개구리들한테 우물 밖의 「세상」 이야기를 들려 주었습니다.

(カラスはカエルたちに井戸の外の「世」の話を開かせてくれました。)

(韓国、小3年)

「세상」에 태어나 머리 한 번 안 깎아본 것은?

(「世」に生まれて一回も髪を刈ったことがないことは?) (韓国、小3年)

このように韓国と北朝鮮ともに、「세상 sesang (世、世の中)」は、「世のなかで一番速い」、「世に生まれて」、「世の人々」、「井戸の外の世」のように、人々の見聞の範囲、生活圏を示すことばとして使用されている。

「世、世の中」と「世界」の語用的違いは、次の両国教科書での「세계 segye (世界)」の使用例をみるとよりはっきり表れる。

「세계」 여러 나라 사람들이 축구 경기를 보기 위하여 우리 나라에 올 것입니다.

(「世界」の各国の人々がサッカー競技をみるために我が国を訪ねるでしょう。)

(韓國小2年)

「세계」 인종의 신체적 특징

(「世界」の人種の身体的特徴) (韓國小6年)

이와 같이 통신은 발달을 거듭하여, 「세계」는 이웃같이 좁아져...

(このように通信の発達によって「世界」は近所のように縮まって...)

(韓國小5年)

참으로 금강산은 아름답기도 「세계」에서 으뜸가는 산입니다.

(実にクムガン山は「世界」で最も美しい山です。)(北朝鮮人民2)

하기에 온「세계」가 경애하는 대원수님을 위인중의 위인이시라고 …
 (ですから、全「世界」が敬愛する大元帥さまを偉人の中の偉人であると…)
 (北朝鮮高等中 1)

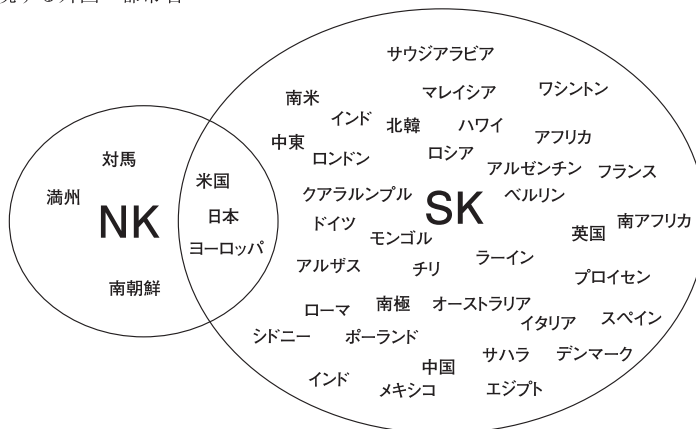
「세계」인민들은 평양을 희망의 등대로 우러러보고 있습니다.
 (「世界」の人民達はピョンヤンを希望の燈台として仰ぎみています)
 (北朝鮮人民 4)

上の例で「세계 segye (世界)」は、意味的に自国を囲む外国、人類社会などを示す具体的な区画性を持つことばで、「세상 sesang (世、世の中)」と区別される。つまり2つのことばは類似語であるといっても、それぞれの使用範囲が明確に違う。しかし、北朝鮮の教科書のなかで「世界」の使用例をみると、そのほとんどが、「世界第一の」、「世界的に有名な」「全世界が敬愛する」など最高・最上の意味を強調するため用いられており、これはむしろ「この世で一番」のような言い方とあまり違いがない。

結局、北朝鮮の国語教科書のなかで、「世界」は「世」よりその使用頻度が乏しいだけでなく、その使用においても、ことばの実際の意味が充分区別されていない。要するに、北朝鮮の教科書には、外の「世界」、との交流もなければ、あらゆる国々の相互作用によって形成される国際社会に関する具体的概念自体が欠けている。このことは北朝鮮の教科書の中に出現する外国名の乏しさによって裏付けられる。図4のように、韓国の教科書には現代世界の外国名や地域・都市名が77あまり出現していることに対して北朝鮮の教科書に出ている海外地域名はほぼゼロである。

「家族」が類似語の「家」に取って代わられているように、具体的な意味を持つ「世界」が抽象的なことばである「世、世の中」に代替して使用されていて、世界は北朝鮮の外部に存在する不明瞭な空間にすぎない。従って、具体的な外国や都市名が言及される余地もない。

図4. 教科書に出現する外国・都市名



4. 分析結果の考察

学校教育は社会化の過程であり、それは国民を育てる、つまり国民アイデンティティの形成の過程である。そのため支配イデオロギーの言語的具現である教科書ディスクールには国民アイデンティティを構築するイデオロギーが働いている。北朝鮮のような全体主義国家の学校は独占的なイデオロギー教育の場である。そのため北朝鮮の教科書は金父子をほめたたえるプロパガンダが剥き出しである。しかし、興味深いのはその深層の言語使用に織り込まれているイデオロギー操作である。つまり、北朝鮮当国が自国民に着させようとするアイデンティティの言語的構築の仕方である。

北朝鮮の小学校の国語教科書の使用言語を高頻度で出現する名詞を中心に同時代の韓国の教科書に照らし合わせて分析を行った結果、ある種の名詞における類似語の代用やことばの使用範囲の拡張などが活発に行われるなか、次のような語用論的特徴がみえる。

教科書のなかでは常に集団的主体である「我々」が強調されるなか、国家元帥を「お父さん」と呼ぶことが普遍的になっている。さらに親族名の使用も直系家族だけではなく共同体の構成員の間でも広く通用されている。国家元帥と「我々」国民の関係を親子関係に縛り付け、国家元帥への忠誠に親孝行という必然性を与える。同時に父、母、兄、姉などの親族名の使用の範囲が家族の範囲から国民の範囲に移行していて、国全体が一つの疑似家族のような形をなしている。従って教科書で血縁の関係を内包する「家族」より、「住まいと暮らしを現実的に一緒にする集団」を示す「家」の使用が優先されるのは当然の成り行きである。つまり、個人主義的概念の「家族」より集団主義的概念の「家」の使用を優先させながら個々の家族の存在を弱め国家共同体の存在を強めているのである。

「我々」の「家」なる国家の外部つまり外の世界は二分されている。そこには北朝鮮の安寧を脅かす「敵」か、金父子の功績をほめたたえる「世」が存在するのみである。敵なるよそ者は「野郎」であり「敵」であり「仇敵」である。よそ者から受けた被抑圧の記憶と戦いのエピソードは多数の物語に再生され伝達される。物語のなかで敵が犯した悪行の残酷さや激戦の様子は鮮烈な文体で生々しく描写されている。反面、「世、世の中」は外部世界の友邦を網羅して指し示す。しかし具体的な人類社会を示す「世界」を「世、世の中」という、より抽象的かつ観念的なことばに代用することで実体的国際世界の存在をぼやけさせる。すなわち、教科書のなかには国際社会的交流の機微が全く無く、「世、世の中」とはもっぱら「我々」の自己評価のために必然なよそ者の役を演じるのみである。

上の考察を総合すると次のような主体の像が浮かび上がる。個人の「私」は常に集団の「我々」に溶け込んでいる。「我々」の間で親族名を共有すると同時に「我々」の共存の集合体である「家」を個別の「家族」より優先することで、「我々」は疑似家族の鎖で繋がれる。「我々」の家父長は「お父さん」の金父子である。かくして「我々」は横的の「家族」の関係、縦的の「親子」関係によって互いに堅く縛りつけられている。ところで「我々」が認識するかぎり「家」は侵略者のよそ者によって囲まれている。「お父さん」の意志に従って「家」を防衛するのは子どもの「我々」の

本分である。「お父さん」の正しさは「世、世の中」が認めている。

5. 結論

本論では、北朝鮮の小学校国語教科書の「我々」、「お父さん」、「家」、「敵」そして「世、世の中」の5つのことばを中心軸として織り込まれている「社会主義大家庭」また「地上の樂園」のディスクールのありさまを検討してきた。そこには家父長制完全統制国家の国民像が構築されている。そして、国民アイデンティティの言語的構築の本質は内と外、我々とよそ者の極端に両分化した世界観に基づいて凝縮と服従と遮断を正当化する論証のプロセスでしかない。

韓国の諺に「井戸の中のカエル」ということばがある。深く狭い井戸の底のカエル達は外の世界がどんなものかを知らないまま遥か高くに見える空がいつ落ちるのか不安に脅える。

一人の人間の権力への欲望によって無数の人が一生「井戸の中のカエル」の立場に陥っている。北朝鮮の現在の政治体制はいずれ崩れる。かつての東欧の国々のように資本主義経済システムに溶け込まれるのも時間の問題であろう。しかし、半世紀以上続いた北朝鮮のイデオロギーの密室のなかで生きてきた人々の損傷された精神世界が癒されるまでには、また半世紀以上の時間が必要になるかもしれない。

参考文献

- Althusser, L. アルチュセール, L. 1970. 「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」『アルチュセールのイデオロギー論』(柳内隆訳) 三交社、1993.
- 川本彰. 1980. 『「家」の構造』. 社会思想社.
- 国立国語研究所. 1997. 『分類語彙表』. 国立国語研究所資料集 6.
- 鐸木昌之. 1992. 『北朝鮮 社会主義と伝統の共鳴』 東京大学出版会.
- チェ・ホンギ 최흥기. 1995. 「현대한국의 가족제도의 변화」『한국사회론』 사회비평사.
- 日本総合研究所. 1987. 『アジアの家族構造と機能に関する研究』. 総合研究開発機構発行.
- リ・スンヒョン 이순형. 1996. 「가족주의, 집합주의, 성취지향성과 양육가치관의 관계」『한국사회학』. 30, 545-573.
- Calhoun, C. 1994. Social Theory and the Politics of Identity. In Calhoun, C(ed.) *Social Theory and the Politics of Identity*. Blackwell.
- Durkheim, E. 1985. *Education et sociologie*. Presses Universitaires de France.
- Foucault, M. 1969. *L'archéologie du savoir*. Gallimard.
- Fujimura, I. 2005. La féminisation des noms de métiers et des titres dans la presse française (1988-2001). Dans Mots, 78, 37-52.
- Pêcheux, M. 1975. Mises au point et perspectives à propos de l'analyse automatique du discours. Dans *Language*, 37, 7-80
- Pêcheux, M. 1981. *Langue Introuvable*. François Maspero.
- Pêcheux, M. 1983. *Language, Semantics and Ideology*. The Macmillan Press.
- Scheff, T. 1994. Emotion and Identity: A Theory of Ethnic Nationalism. In Calhoun, C(ed.) *Social Theory and the Politics of Identity*. Blackwell.
- Sinclair, J McH. 1994. Trust the text. In Coulthard, M(ed.) *Advances in written text analysis*. Routledge.
- Stubbs, M. 1996. *Text and Corpus Analysis*. Blackwell.
- Stubbs, M. 2001. *Words and Phrases*. Blackwell.
- Triandis, H. 1995. *Individualism & Collectivism*. Westview Press.

『大辞泉』1995. 小学館. 東京.

『새우리말 큰사전 (大辞典)』. 1981. 三省出版社. ソウル.

『조선말사전 (朝鮮語辞典)』. 1968 科学院出版社. 平壤.

分析資料

『경애하는 수령 김일성대원수님어린시절』 인민학교 1 학년용. 1999. 교육도서출판사

『敬愛する首領キム・イルソン大元帥様の幼い時』 人民学校 1 学年用 .1999. 教育図書出版. ピョンヤン

『국어』 인민학교 2 학년용. 2000. 교육도서출판사

『国語』 人民学校 2 学年用. 2000. 教育図書出版. ピョンヤン

『국어』 인민학교 3 학년용. 1990. 교육도서출판사

『国語』 人民学校 3 学年用. 1990. 教育図書出版. ピョンヤン

『국어』 인민학교 4 학년용. 1992. 교육도서출판사

『国語』 人民学校 4 学年用. 1992. 教育図書出版. ピョンヤン

『국어』 고등중학교 1 학년용. 2001. 교육도서출판사

『国語』 高等学校 1 学年用. 2001. 教育図書出版. ピョンヤン

『국어』 고등중학교 2 학년용. 2001. 교육도서출판사

『国語』 高等学校 2 学年用. 2001. 教育図書出版. 피ョン얀

『국어 : 읽기』 초등학교 1 학년용. 2001. 교육부.

『国語 : 読本』 初等学校 1 学年用. 2001. 教育部. ソウル

『국어 : 읽기』 초등학교 2 학년용. 2001. 교육부.

『国語 : 読本』 初等学校 2 学年用. 2001. 教育部. ソウル

『국어 : 읽기』 초등학교 3 학년용. 2001. 교육부.

『国語 : 読本』 初等学校 3 学年用. 2001. 教育部. ソウル

『국어 : 읽기』 초등학교 3 학년용. 2001. 교육부.

『国語 : 読本』 初等学校 3 学年用. 2001. 教育部. ソウル

『국어 : 읽기』 초등학교 4 학년용. 2001. 교육부.

『国語 : 読本』 初等学校 4 学年用. 2001. 教育部. ソウル

『국어 : 읽기』 초등학교 5 학년용. 2001. 교육부.

『国語 : 読本』 初等学校 5 学年用. 2001. 教育部. ソウル

『국어 : 읽기』 초등학교 6 학년용. 2001. 교육부.

『国語 : 読本』 初等学校 6 学年用. 2001. 教育部. ソウル

